島根県立大学
国際関係学部　国際関係学科
国際関係コース

令和８年度（2026 年度）
学校推薦型選抜（一般推薦）

小論文

【解答時間　９０分】

以下の１から８をよく読んで、その指示に従うようにしてください。
指示に従わない場合は、不正行為と見なしますので、注意してください。

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。許可なく問題冊子を開いた場合は、不正行為と見なします。
2. 解答時間は９０分です。
3. 試験問題は、１ページから５ページまでです。解答開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明な箇所等があった場合は、直ちに申し出てください。
4. 解答用紙は２枚あり、問題冊子とは別になっています。解答は指定された解答用紙の解答欄に横書きで記入してください。
5. 受験番号、氏名は２枚の解答用紙の所定欄すべてに記入してください。
6. 問題冊子の余白を下書きに利用しても構いません。
7. 試験時間中の退出はできません。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「政治」とは何か。

この問いに対する回答には実に様々なものがありますが、本書で論じる「政治」とは、何者かが権威として立ち現れ、人々がその権威に服従すべきだと考えるような状況を意味します。

新聞やニュースで取り上げられる「政治」とは日本やアメリカといった国家における権威と服従の問題といえますが、国家を舞台とせず、企業や学校、ひいては一家庭内でも権威と服従の問題は存在します。その意味で、政治とは日常的に観察される出来事だといえます。

「権威」とは、簡単にいえば、私たちが自発的に服従したいと思うような存在のことです。

（中略）

たとえば、あなたが誰かのことを「偉いなあ」と思っていて、その「偉い人」の言うことにあなたが従うとき、あなたとその「偉い人」との間には「政治」という現象が出現していることになります。

権威が存在するところでは、権威に対して服従が求められます。あなた自身が他の人々にとっての「権威」として振る舞う以外、あなたは、誰かの権威に服従することが求められているはずです。その権威とは、家庭では親であり、学校では教師であり、会社では上司です。

権威に対して人が服従するとき秩序が出来上がるので、服従とは、社会秩序を保つためのセメントみたいなものだといえます。

ですから、権威の立場からすれば、みんなが大人しく従順に従ってくれれば、秩序を維持するのは簡単です。

そのため、「服従することは良いことだ」と権威の地位にある人々は決まって主張するものなのです。

しかも、日本人は秩序を特に重んじる傾向が強いようです。

それが証拠に、日本人の親はたいてい、子供に向かって「先生の言うことをよく聞きなさい」と言います。この「言うことを聞く」というのは、「先生の発言に注意深く耳を傾けなさい」という文字通りの意味ではなく、「先生の指示に従いなさい」ということを意味しているのはいうまでもありません。

（中略）

日本人がよろこんで服従する傾向が強いのは、こんなところに一因がありそうです。

（中略）

不服従というテーマについて、歴史に立ち返って考える際、見逃すことのできない書物がいくつかあります。

そんな古典のひとつに、16 世紀フランスの法律家エティエンヌ・ド・ラ・ボエシが執筆した『自発的隷従論』があります。

ド・ラ・ボエシはこの作品の中で、ちょっと意表をつく問題提起をします。それは、たった 1 人の人間にすぎない国王になぜ大勢の人々が黙って服従しているのか、という問いです。

2 人や 3 人の場合は 1 人を相手にして勝てなかったために、その 1 人に従うということはありうるかもしれません。しかし、100 人、いや 1000 人もの人々が、たった 1 人の人間の命令にじっと我慢して従っているのは、一体どういうわけか。

なるほどそう言われてみれば、たしかに「奇妙」です。その現象について、ド・ラ・ボエシは言います。「それは、彼らがその者をやっつける勇気がないのではなく、やっつけることを望んでいないからだ」。つまり、人々は「自発的」にたった 1 人の支配者に「隷従」しているのだ、というわけです。『自発的隷従論』という書名はこの主張を端的に要約しています。

人々がたった 1 人の支配者に黙って服従することが常態化してしまうと、それは人々の習慣となります。習慣として身についたことは、自然なこととして人間は理解するものです。

日本人が箸で食事をする習慣を幼いうちに体得すると、箸を使った食生活は自然なものとなり、取り立てて不思議に思うことはありません。でも、インド人は右手だけを使って食事をしますし、欧米人がナイフとフォークを使うように習慣はそれぞれ異なります。それと同様に圧政者のもとで隷従を長年強いられてきた人々は、それ以外の可能性を考えることをしないで、服従することが習い性となってしまいます。

したがって、支配者が圧政者となり果てて、人々を抑圧しているとしても、服従するのが自然な状態である以上、服従をあえて拒否するには多大な心理的抵抗が生じることになります。

こう考えると、（A）圧政者による政治の不正を正すのに、私たちがまず戦わなければならないのはその圧政者本人ではないことがわかります。むしろ、私たちは、私たち自身の内面に確立されてしまった、服従する「習慣」と戦わなければならない、とド・ラ・ボエシは指摘しています。

その服従する「習慣」とは、思考の惰性でもあるといってよいでしょう。

18 世紀アメリカの思想家トマス・ペインは、その著書『コモン・センス』の開巻冒頭で書いています。

「物事を間違っていると考えようとしない長い間の習慣によって、すべてのものが表面上正しいかのような様子を示すものだ。そして初めはだれもがこの習慣を守ろうとして、恐ろしい叫び声を上げるのだ」

トマス・ペインは、アメリカ独立革命に思想面で大きな影響力を持った人です。アメリカがイギリスの植民地でいることは「習慣」となっているが、それが正しいこととは

必ずしも言えない。しかし、それが習慣となってしまっているために、その習慣を打破しようとする試みには「恐ろしい叫び声を上げる」というわけです。

しかし、時間が経(た)てば人々のものの考え方も変わる、とペインは述べて、イギリスによる「権力の濫用」に抵抗することを読者に呼びかけました。

さて、この「習慣」ですが、言い換えれば「慣れ」ともいえます。

何でも少しずつ変化してゆくうちに、次第に「慣れ」て、しばらくすると大きな変化になっていることに気づくことがあります。

チリも積もれば山となる、です。

同様に、不正なことでも「これくらいいいだろう」と口説かれて、「確かにあまりひどいことではないな」とその不正なことに手を染めたとしましょう。しかし、「これくらいいいだろう」を何度も繰り返すうちに、いつの間にかとんでもない悪事に関わってしまっているということがあります。企業の会計不正はその典型例です。

このように少しずつの変化に慣らされるうちに、いつの間にか、とんでもない不正が横行するようになってしまう。

不正権力に服従するのも、小さな不正を見逃すことを繰り返すうちに、不正に「慣れ」てしまう結果だ、ということができます。

（中略）そもそも、（B）私たちが権威に服従しがちであって、むしろ服従しないことの方が難しいと感じるのはなぜなのでしょうか？

それは、ある権威や権力に服従する限り、自分が安心できるからです。自分が信頼し、場合によっては崇拝している権威が決めることに従っていれば、自分は間違いを犯すはずがないと信じられるからです。

その上、その権威に従うのが自分だけでなく、他にも多くの人々が服従しているなら、なおさら安心感は増します。

（中略）

多数派に同調している限り安心だ、ということは、逆に言えば、服従しないことには勇気が必要だということです。多数派を権威とみなす限り、これに服従しないと安心できないからです。

18 世紀ドイツの哲学者カントが「啓蒙(けいもう)とは何か」を論じた際、掲げたモットーは「知る勇気を持て（Sapere aude)」でした。

ヨーロッパの知的世界で巨大な権威を教会が有していた時代では、教会が権威をもって教えることに従うことが当然視されていました。これに対し、カントは、教会権威が教えるところに従うのではなく、自分の理性を頼りに自分で考え判断せよ、と主張しました。

権威に頼らず自分の頭で判断することには不安が伴います。だからこそ、「知る勇気を持て」と読者に呼び掛けたのです。

（中略）

多数派の支持を受けている存在や、崇高だと思われている人々には「権威」の後光がさしています。これに服従することで人は安心感を得るので、服従しないことにはかなりの勇気が必要となるのです。

さらに、服従することは、自分が責任を取らなくて良いことを意味するようです。（中略）

命令を実行するとき、命令される人は命令する人にとっての「道具」でしかありません。だから、命令される人には責任がなく、責任を負うのは命令する人だと考えるのです。

ですが、服従しさえすれば、本当に責任はないのでしょうか？

命令を実行する人は、実際に、命令された事柄を実現しています。その限りでは、命令する人に劣らず、そのことに深く関わっていることに変わりはありません。

ただ、ここでの問題は、自分の行動について自分で決定しない、という点です。

単に「命令されたから」命令されたことを行うというのは、自分で自分の行動を選び取っておらず、他人任せなのです。

自分の行動の選択を他人任せにするのは、別に「命令」されなくても、しばしば日常生活で起こっていることです。

「自分は、本当は文系志望なんだが、親が理系を選択すべきだというからしょうがない」

「自分はこの男性が特に好きではないんだけど、親や知人が強く勧めるから、この人と結婚することにした」

「自分は今勤めている会社が嫌で嫌でたまらないんだけど、辞める勇気もなかったところ、友人からの助言に従って辞めることにした」

こんなふうに考えている場合は、いずれも、自分で自分の望むところを選ぼうとしていないことになります。

しかし、その結果、「理系学部に進学したけど、勉強がつまらなくてどうしようもない」とか「結婚はしたものの、結婚相手が大嫌いになっちゃった」とか「会社を辞めたはいいけど、再就職先がない」なんていうことになったらどうするのでしょうか。

「親がそうしろというから」「友人がそうアドヴァイスしたから」といくら愚痴を言ってみたところで親や友人には責任の取りようがありません。

（中略）

判断も決定もしないことから責任がなく、楽で自由だと思い込んでいるわけです。

確かに、ある選択を迫られる時、自分で判断し決定しなければならないことは、決して楽ではありません。しかし、本来、自分で意思決定することこそが「自由」の意味するところです。

ですが、自分で意思決定することに伴う責任から逃れられることにも、一種の解放感があります。その解放感を「自由」と取り違えることが少なくありません。

しかも、「命令されたから」大量虐殺の執行許可を与えたアイヒマン*は、「命令されたことをやっただけ」とは言っても、その責任を取らされ死刑となりました。

ナチス・ドイツの戦犯を裁いたニュルンベルク裁判については、俳優ピーター・ユスティノフ**が雑誌『ニューヨーカー』にこう書いています。

「何世紀にもわたって、人類は服従しないことを理由に処罰されてきた。ニュルンベルクで、人類は初めて服従したことを理由に処罰されたのである」

（C）服従するということは必ずしも道徳的に正しいことではないし、服従することで責任は必ずしも免除されるわけではない。そのことを、第二次世界大戦の経験を経て、私たちは改めて噛(か)み締めることとなったわけです。

注

*アイヒマン（Otto Adolf Eichmann, 1906～62）：ナチス・ドイツの親衛隊中佐。ゲシュタポ（国家秘密警察）のユダヤ課長として第二次世界大戦中 600 万人のユダヤ人を虐殺したかどでイスラエル政府に追及され、1960 年アルゼンチンで逮捕、イスラエルの特別法廷で死刑に処せられた。（典拠：『山川世界史小辞典改訂新版』）

**ピーター・ユスティノフ（Peter Ustinov, 1921～2004）：イギリスの映画俳優・監督・作家。映画「スパルタカス」（1960）と「トプカピ」（1964）でアカデミー助演男優賞を獲得し、1990 年には Sir の称号を与えられた。（典拠：https://www.allcinema.net/person/15386）

（出典：将基面貴巳『従順さのどこがいけないのか』ちくまプリマー新書、2021 年、24～26、32～43 頁。出題に当たって、文中のルビ・傍点は原文に従ったが、小見出しは削除し、数詞の漢数字はアラビア数字に代え、文章の一部とフォント・文字装飾を改め、注を補った。）

問１　下線部（A）に関して、なぜ「その圧政者本人ではない」のか、本文中の表現を用いて、60 字以内で説明しなさい。

問２　下線部（B）に関して、なぜ「服従しないことの方が難しいと感じる」のか、100 字以内で説明しなさい。（本文中の表現を用いても良い）

問３　下線部（C）に関して、筆者のこの主張についてのあなたの考えを、高等学校での地理歴史・公民科目での学びや、あなたが関心を持つ政治・社会情勢（国内・国外は問わない）などと関連付けながら、800 字以内で述べなさい。